

日本国憲法と仏公法の比較論文によって フランスで超難関の博士号を取得

理工学部／人文・社会学教室

植野 妙実子 教授

Mamiko Ueno

学問分野同士の垣根が低くなった現在、理工系の人間にも法律の知識がかなり重要になり始めている。法学部でフランス公法、総合政策学部や理工学部で憲法、また大学院でも授業をもっている植野妙実子教授は、国際学会でも数多くの発表をおこなっている才媛。理工系出身の法曹関係者が多く社会に出て行くことに期待を寄せているという植野先生のこれまで辿ってきた道のりを、少女時代から紹介していこう。



モダンな一家に育った 文学少女が「憲法」と出会い 将来の目標を大学教員に決定

子どものころはお婆ちゃん子だったという植野先生。そのお婆ちゃん、実は非常に才気あふれる女性で、波瀾万丈のドラマのような人生を送った人であった。

「普通の国鉄マンだった祖父に嫁いだ祖母は、30歳くらいまではおとなしく主婦をしていたらしいのですが、30代半ば過ぎに一念発起して洋裁を学び、当時珍しかった男性のスーツを作る洋裁屋になり、大変繁盛したそうです。また、地域の看護婦協会の会長を務めるなど多方面に活躍した人でした。頭が切れるだけでなく

腹も据わっていて、戦時中に投資をして土地を手に入れるなど、男勝りの辣腕も発揮していたようです」
父親は私立の名門海城高校の国語の教師で、後に東京都高校野球連盟の理事も務めたスポーツマン。そこに嫁いできた母親は、宮城県気仙沼市に古くから伝わる名家で100人もの漁師を抱える網元の娘であった。

「両親は二人ともとても仲がよく、父が忙しくなるまでは毎週のようにいっしょに洋画を観に行っていた記憶があります。当時としては珍しく『パパ』『ママ』という呼び方をしている、出かけるときと帰宅のときにはあいさつ代わりのキスをするようなモダンな家庭でした。今思えば、私が留学したとき外国の生活に違和

感なく解け込めたのは、当時の体験のおかげでしょうね」

小さいころから自分の家庭が友だちの家庭と違うことに気づいていた植野先生。何しろお婆ちゃんの家には1950年代にすでにテレビがあり、アニメの「ポパイ」や「ルーシーショウ」といった洋風の番組を近所の人が見に来たりしていたのである。母親もどちらかといえば派手な装いを好む方で、戦時中に着物を着て父に送るための写真を撮り、非国民呼ばわりされたこともあったとか。植野先生自身はといえば、おしやまでおしゃべりな女の子であった。

「学校の成績もよかったです。子供ながらに周囲の期待もひしひしと感じていました。ところが当時は本番に弱く、クラシックバレエを3歳から習っていたのですが、いざ舞台上上がるという日に熱を出して寝込んだことを覚えています。精神的にまだまだ子どもだったんですね」

そんな植野先生は父親の影響もあって、子どものころから読書が大好き。小学生のときに少女文学全集を読み破り、中学校も高校も文芸部長として活躍した。毎日日本を読んだり小説を書いたりして、ほとんど勉

強はしなかったという高校時代。将来は小説家になりたいと本気で考えていた。

「高校生のとき、高校生向けの文学賞に応募して準優勝だったので、そのとき優勝した人の作品を読んで強い衝撃を受けました。私にはとても思いつかないようなミステリアスですばらしい短編小説だったので、それをきっかけに私は小説家への道をあきらめました」

それでも文学少女として知られていた植野先生だけに、友人たちや先生方もほぼ全員が文学部に進むものと思いきや、ところが実際に進路として選んだのは、法学部だったのである。

「不遜な言い方ですが、高校2〜3年のときには読むべきものをほとんど読み切ってしまった、大学で文学を学んでも仕方ないという気持ちになっただけです。そんなとき、またまた東大の小林直樹先生が憲法と沖縄問題の関係について書いた本を読んだら、大いに感銘を受け、大学に行ったらぜひとも憲法を学んでみたいと考えるようになったのです」

父にならって教師になりたい気持ちもあり、受験のときにはすでに、



うえの まみこ
1949年、東京都生まれ。1968年東京都立豊多摩高校卒業。1973年中央大学法学部法律学科卒業。1981年中央大学大学院法学研究科博士・後期課程満期退学。大学院在学中にパリ第一大学に留学。退学後、中央大学理工学部専任講師、同助教授を経て、1993年教授に就任。1987〜88年にはエクスマルセイユ第三大学で在外研究、以後毎年同大で開催される国際憲法裁判学会で発表している。2006年、フランスで博士の学位を取得。現在に至る。





将来は大学で憲法を教える教員になろうと決めていた植野先生。その決断には迷いが一切なかったという。

大学院博士後期課程のとき 少ないチャンスを生かし 思い切ってフランスへ留学

小林直樹先生の教えを請おうと東大に行きたかった植野先生だったが、ちょうど大学紛争で試験がなかったため、東大の赤門に対抗する白門として世間に認められていた中央大学に進学した。

「学生紛争の影響で入学後も大学が閉鎖され、夏までまったく授業がありませんでした。そこで同じクラスの名簿をもらって自主的にゼミを作り、先生を電話で呼んで喫茶店で授業をやってもらったりしました。当時は学びたい学生たちが自主的に授業を作り出していたのです」

そんな貴重な経験をした植野先生だからこそ、今の学生たちには物足りなさを感じることもある。今は大に行けば大学がカリキュラムを用意し、先生が授業の準備をして学生たちを待っていてくれる——学びの環境としてはとても恵まれているが、

言い方を換えればベルトコンベアに乗っているようなものなのだ。そのためか、学生たちから自ら学ぼうという確固たる姿勢が感じられないのである。

一方、植野先生は学生時代、学問に対して極めてどん欲であった。ただ憲法を学ぶに飽きたらず、フランス語も習得していずれはフランス公法についても研究したいと考えるようになったのである。

「フランス語を学びたいと考えたのは、小さいころから映画を観ていた影響が大きいですね。中学生のころには放課後に自宅のテレビで少し前の映画を再放映していたので、ジェラルド・フィリップなどが出演しているような映画を妹といっしょによく観ていました。字幕版で音声が残ったままなので、フランス語のエレガントな響きに強く惹かれました」

大学のすぐ近くにあったアテネ・フランスに通ってフランス語を学び始めた植野先生。後に中央大学文学部の教授となる丸山圭三郎先生にも教えを受けた。

「丸山先生が担当していたLLの授業のなかで、とくに熱心な学生には特別講座を開講してくれました。当

として採用された植野先生は、その後エクサンプロヴァンスにあるエクスマルセイユ第三大学との協定により在外研究を同大学で過ごす。研究先の指導教授であったファブルー先生の推薦でいくつかの国際会議にも参加した。

「初めての国際会議はパリの『セナ』と呼ばれる上院を使用したのですが、心臓がドキドキしたのをよく覚えています。エクスマルセイユでの国際会議にも、在外研究でいる間に3回にわたって発表しました」

国際会議での活躍ぶりを目の当たりにしたファブルー先生は、植野先生にフランスで学位を取るよう進言してくれた。

「フランスで博士を取得するために、5名の博士による審査が必要で、ところがファブルー先生が急逝し、審査員に欠員が出てしまいました。そんなとき審査員の一人であったテリー・ルノー先生が、ファブルー先生の代わりに私の好きな審査員を加えていいと言ってくれました。そこで迷わずフランソワズ・ドレフュス先生にお願いすることにしました。日本とフランスとの比較法的な論文を書いたので、日本に興味のある人でないと審査報告書を書くのは難しいと考えたからです。先生も快く引き受けてくださいました」

そんな経緯を経て、昨年ようやく難関を突破。かくて植野先生はフランスの博士号を取得したのである。

現在、植野先生の専門はフランスの人権保障問題。とくに男女平等をはじめとする平等原則に重点をおいて研究している。法学部ではフランス公法のゼミを主宰しながら、理工学部では「憲法」と「教養演習」を



時は先生にも熱意にあふれる方がとても多かったような気がします。伝えたい教員と教わりたい学生とのお互いの強い気持ちが必要なエネルギーになっていったのではないかと

大学卒業後、大学の教員になるために助手試験を受けた植野先生だが、朗報を聞くことはできなかった。ゼミの指導教授、清水陸先生に相談すると、女性を採っても長く働くかどうか疑わしいという考えが強い、と言う。清水先生の勧めもあって、植

担当している。

「理工学部に『憲法』が必要なのは、教職で必修科目だからというだけではありません。技術開発が進むにつれて、理工系の人にも環境問題や生命倫理、人権に関わる問題、法的規制のあり方を十分理解してもらう必要性が生じてきたからです。現在では理工学部から法科大学院や司法試験をめざしている学生も増えているので、大いに期待しています」

自分探しの大学時代には 興味を持ったことに対して 積極的に行動を起こそう

最後に、大学進学をめざす高校生の方々にアドバイスをいただきたい。今後の人生を突き進んでいく上で必要なものとは、いったい何なのだろうか？

「有意義な人生を送るために必要なものは、やはりガッツでしょう。やる気があるか、ないか。その一点がとても大事だと思います。私が考えるに、大学時代は自分探しのとき。とにかくいろいろなことにチャレンジしてほしいですね。もしも高校時代に理工系と文系に分かれて勉強してい

野先生は大学院に進学した。

「大学院博士・後期課程のとき、指導教授を手伝って公務員の試験問題集を作り、経済的に余裕ができました。そこで、修士論文でとりあげた本の著者であるフランソワズ・ドレフュス先生にフランスへ留学したい旨の手紙を出したところ、ちょうどパリ第一大学で外国人留学生受け入れのポストにいるからすぐに来いと誘われ、そのまま半年間留学しました。短い期間を有効に過ごしたかったので、自ら日本人との交流を禁じ、フランス人学生の友人を作るよう心がけました。当時交換授業としてフランス語と日本語を教え合ったエリザベート・キャステルもその一人で、彼女との友情は今でも続いています」

今振り返って考えてみると、ずいぶん思い切って留学したものだと思います。でも、少ないチャンスをものにして本当によかったです」

フランスで出会った先生の 推薦で国際会議に参加し 博士号も取得した

帰国して数ヶ月後、ようやく教員

たとしても、大学に入学してやっばり自分に合わないと思ったら、そこで進路を変えればいい。自分自身がどんなことに興味があり、何をしたいのか——それを知るのが大学時代なのです。勉強も確かに重要だけど、さまざまなことに挑戦して自分なりの方向性を見つけてほしいと思います」

近年では理工系でも学際的な素養が求められるようになってきた。理工学部だからといって、法学が必要ないということはないのである。もちろん法律だけでなく、さまざまな分野の知識を得ればよい。そうすれば自ずと人生も豊かになってくるはずだ。

「私は高校時代、世界史が好きでした。その後、実際にフランスを訪れてお城や美術館を訪ねるたびに、学校で学んできた本物に肌で触れることができて、とても豊かな気持ちになります。高校のときに憲法と出会わなかったら、美術史を専攻していたかもしれませんね」

もし皆さんが大学に入ってから新たに興味を覚えたものがあれば、とりあえず行動してください。きっと道が見えてくると思いますよ」